

白血病であることを知った患者の看護

—死の恐怖の中で、希望ある一日を過ごすことができた一症例よりの学び—

7階西病棟

○石川 敦美・田村美由紀・山中 真紀

近安 久美・長山 玉代・西岡 美貴

平林佐代子・森 郭子・岡林 安代 他

I はじめに

当病棟は、予後不良の疾患で、死の転帰をとる患者と接する機会が多い。しかし私達は、日頃死を目前にし、苦悩する患者の心理を深く追求することも少ないまま患者に接していた。

今回、発病時より自分が白血病と知りながら、4年間入退院を繰り返していたO氏を看護する機会を得た。O氏は初回入院中に、やはり病名を知った同じ疾患の22歳の女性と知り合い、その死に至るまでの経過を見ていた。その2年後にO氏は再発し、化学療法の効果がないと知り、“もう気力がない、どうせ死ぬことはわかっていたが、怖くて怖くて心臓が爆発しそうだ。”と、私達に死の恐怖を訴えた。キューブラー・ロスは死ぬ時の心理過程の希望の中で、¹⁾「患者のすべては、微量の希望を持ち続け、とくにつらい時期時期をそれによって励まされている。」と述べている。そこで私達は、この患者にとって、希望とは、子供に面会できることだと考え、希望を実現するために援助した過程を考察し、今後のケアに役立てたい。

II 研究期間

昭和62年6月10日～昭和62年8月12日

III 患者紹介

患者：O氏、女性、34歳

病名：急性リンパ性白血病

家族関係：既婚であるが、夫とは発病前から別居状態であり、現在は実母、義父との3人暮らしである。子供は8歳の男児がいるが、夫が引きとり姑が面倒をみている。夏休みなどは、子供を実家に連れてきて何日か一緒に過ごしていたが、入院中は遠方でもあり面会に来ることは少なかった。友人は幼なじみの男性がおり、毎日のように面会に来ていて、患者の精神的支えとなっていた。

性格：神経質かつ几帳面である。行動力があり、思ったことははっきり口に出して言う方である。

職業：化粧品美容部員

経過：昭和58年12月発症。外来受診時カルテを見て病名を知った。昭和58年12月～昭和61年12月まで、化学療法のため5回入退院を繰り返した。その間、同病名で入院していた女性患者の死も見てきた。5回目の入院は、白血病の再発で強力な化学療法を行ったが、部分寛解のまま退院となった。昭和62年2月下旬より、白血病細胞の増加と血小板の減少を認め、昭和62年4月1日、6回目の入院となった。治

薬も使用し化学療法を行ったが、効果なく副作用により白血球、血小板、赤血球が減少し、空気清浄機の使用、輸血を繰り返した。6月頃より、急激に白血球細胞が増加し、白血球中90%以上を占めるようになった。6月19日には、白血球細胞の浸潤によると思われる顔面神経麻痺が出現し、また口腔内の潰瘍形式による開口障害がみられた。7月4日頃、肺炎を併発。一時軽快していたが、7月下旬に再燃し8月12日永眠した。

Ⅳ 看護の展開

患者は治療の効果がないと知り、“もう気力がない、どうせ死ぬことはわかっていたが、怖くて怖くて心臓が爆発しそうだ。”と死の恐怖を訴えた。また、処置やケアを早くしてほしい、空気清浄機の音がうるさいなど、頻繁にナースコールを押した。私達は、患者が不安に思っていることを表現することができるようにする。家族や友人と満足できる一日を送ることを目標に看護を実施した。受持ち看護婦は、なるだけベットサイドにゆき患者の表情に注意し、患者の言葉に耳を傾け、手を握るなどのスキンシップを図り、患者の不安を軽減するように努めた。一方、家族や友人と自宅で過ごす機会をつくるため、患者や家族と相談の上外泊を計画した。また、患者の死の恐怖からくる孤独感を少しでも軽減するために、面会を自由として、常に家族、友人が患者の傍でいられるよう配慮した。そして、ケアは家族と共にしない、患者の状態について担当医、看護婦、家族で毎日情報交換をするようにした。患者が不安に思っている症状等については、担当医から納得のいくよう説明してもらった。身体的苦痛については、対症療法を行なった。精神的には、母親に向かって怒りをぶつけるなど自分の不安を表現するようになるとともに、幼なじみの友人や家族が傍にいて安堵感を得られたようであった。そして私達にも、“眠ってしまったら、あっちへ行ってしまうようで怖い。”など、心情を話すようになった。病状が進行し、顔面神経麻痺が出現した時期からは、“子供には会わん。こんな姿を見せたらかわいそうだ。私が我慢したらいいのだ。”という言葉が何度か聞かれるようになった。患者は、子供に会いたいという希望を持っていながら、子供が持っている病前の母親としてのイメージを崩さないために、子供には会わないと思っておりそれが患者の孤独感を強めていると思われた。私達は、母親として子供のイメージをなるべくそこうことなく、子供といる時間を多く持つことが、現状では一番良いことだと思われた。そこで、このことを実現するために、患者に子供は母親に会いたいと思っている。病状がおちついている時に会ってはどうかと働きかけたが、“こんな苦しそうな姿を見せたら、子供は一生心に焼きついてしまうだろう。会わん方がいい。”と拒否的であった。患者には、顔面神経麻痺の状態が軽度であることを説明し、鏡を見せて納得させた。そして、日中はベット柵にもたれて坐位で過ごす時間が多し、友人や家族、看護婦とは1時間以上面談しても疲労感はないことなどから、短時間の面会は可能であると思われたので、子供は病氣と闘っているありのままの母親の姿を見て成長することなどについて、患者と対話を持った。患者は徐々に“今の状態だったら面会でできそうな気がする。”など前向きの姿勢が見られるようになった。患者には、“子供が会いたがっているので8月6日に来るそうよ。”と説明した。患者は“ター君が会いにくる。”と面会を楽しみにするようになった。面会に備え、看護婦にシーツ交換や清拭等を依頼する姿勢がみられた。面会当日は、面会に来る時間に合わせて口内痛緩和のため鎮痛剤を使用し、患者の身の回りを整え、できるだけ病前のイメージに近くなるよ

うに配慮した。面会中は、患者と子供の二人だけにして、時折患者の母親が訪室するのみとした。その間、苦痛を訴えることもなく子供と過ごし、疲労感も訴えず“ター君がお花を持ってきてくれた。肩ももんでくれたんよ。”と、母親や看護婦に嬉しそうに話す姿が見られた。その数日後、肺炎が悪化し永眠した。

V 考 察

E・キューブラー・ロスの死ぬ時の心理過程をこの症例にあてはめてみると、完全寛解を維持していた時期は、“化学療法の副作用もないし、私は特別みたい。”と病気を否認していたが、昭和61年9月に再発してから死亡するまでの時期は、怒り、抑うつ状態で経過した。特に最終の入院では、闘病意欲をみせたかと思うと、“どうせ治らん。”と怒り、沈み込むという繰り返しであった。この時期私達は、患者が死への不安、恐怖、肉体的苦痛から解放されるよう、家族・患者の友人と共にその軽減に努めた。このような状況の中で患者が子供に会うという希望を実現に向け努力した。寺本は、²⁾「人はいかなる逆境におかれても、必ず何らかの希望を持っている。その隠れているものを私達が、ちょっと引っ張り出すことがとても大切ではないか。その点に向かって動き始めることができるように、まわりの条件を整えていく。それによって、はじめて病人に希望を持たせることができるのではないのでしょうか。」と言っている。この患者の場合も、苦しい闘病生活の中で子供に会うという希望を引き出し、目標達成に向かって家族及び医療従事者全員が努力した。その結果、患者は苦痛なく子供の相手ができたこと、病前に近い状態で子供と接することができたことなど、つかの間の希望ある一日を過ごすことができたことと考える。死を目前に恐怖の中で苦しんでいる患者の希望を見つけ出し、医療従事者や家族が協力して、それを実現するよう援助することは重要である。それは、たった一日でも患者が満足した日を送る、そして、その日は死の恐怖も遠のいたと思える症例であった。病名を知り死を目前にして苦悩する患者の看護をするためには、以下のことが大切であると学んだ。

- ① 患者の精神的支えとなる人を知り、協力を求める。
- ② 患者の潜在的な希望を引き出すよう努力する。
- ③ 患者の希望を実現するために、家族・医療従事者全員が協力する。

VI おわりに

病名を知り、死を目前にして苦悩する一人の患者を通して、患者の小さな希望を実現するためには、医療従事者と家族が協力しあうことが大切であることを学んだ。当病棟には、現在も多くの子供不良の患者が入院しているが、今後は私達自身が、どう生きていくか、死をどうとらえるかを明らかにし、患者と接していくことが大切であると思う。その中で、一人一人の患者の希望を実現していくよう努力していきたい。

引用・参考文献

- 1) E・キューブラー・ロス：死ぬ瞬間，P174，読売新聞社，1971．
- 2) 寺本松野：死と向かい合っている人たちの“希望”をいかにくみ取り育むか，月刊ナーシング，6

(13), P1907~1913, 1985.

- 3) アルフォンス・デーケン：死への準備教育，第1～3巻，メヂカルフレンド社，1987.
- 4) 田邊順一・他：特集“死”。そして死にゆく人々のいのちへのケア(1)
- 5) 馬場昌子・他：特集“死”。そして死にゆく人々のいのちへのケア(2)
月刊ナーシング，6(13)，1985.
- 6) 柏木哲夫：死にゆく人々のケア，医学書院，1983.
- 7) 寺本松野：続・看護の中の死，日本看護協会出版会，1982.

(昭和63年6月10日。高知にて開催の全国国立大学病院中国・四国地区看護研究発表会で発表)